

思春期の心身の健康に関する研究

その2 地域・課程・性による愁訴の差

西種子田 弘芳

A Study of psychosomatic Health Problems at Puberty

No. 2, Differents of Complaint in Locality, Course and Sex.

Hiroyoshi NISHITANEDA

I. 研究目的

思春期青少年の心身の健康に関連する諸要因の把握のために、前著者は、小倉氏らの構想した要因をもとに、1747名の中高校生に調査を実施し、課程間、男女間の愁訴発現の違いを明らかにするとともに、因子分析等を行なって心身の健康に関係する要因の推定を計った。その結果、①身体症状と②心の不安定さの2要因が55%以上の寄与率を示すこと、さらに、③家族間の信頼関係④心の自信⑤日常生活のあり方なども重要な要因であることを明らかにした。また、課程間（実業系高校・普通系高校・中学校）と男女間の比較によって、家族生活や心理的、性格的側面で実業系に、身体症状において普通系に多くの問題点があることを報告した。

そこで今回は、前回の課程間の相違が何故生じるのかを検討するために、各項目の訴えを地域・課程・男女別に比較することとともに、項目間とのクロス的分析でその背景状況を明らかにしていきたいと考える。

II. 研究対象と方法

1. 調査対象

表1

県	課程	♂	♀	計
O	実業系	297		297
	普通系	276	310	586
K	実業系	206	118	324
	普通系	228	68	296
	中学	181	100	341
	計	1,188	656	1,844

前回報告したK県とO県の公立中学校及び高等学校の生徒を対象とした。なお、前回の報告に集計できなかった者も含めて、表1のような構成である。

O県は京阪神に近い、高校進学率95.8%、大学・短大進学率44.4%とかなり高い伝統的進学県である。就業可能な工業地域にも近いし、実業系特に工業系に男子の入学者が圧倒的に多い。

K県は九州南部の第一次産業を中心とした地域にある

が、有名私立進学校もあって全国的に進学県としてのイメージが高い。高校進学率95.4%、大学・短大進学率31.6%といくぶんO県に比して低い。就業可能な工・商地帯がないため、大都市への就職率は東北地方とともに高い県である。また、ここ数年来、私立進学中学校の開設が相つぎ、公立高等学校でも学科再編成・統廃合などが他県に先じて行なわれている。さらに、長期休暇中の補習授業が極めて多く、82年度は夏休み42日間のうち、日曜日が6日あり、残りの36日間を補習にあてる学校もある程の教育熱心県である。

2. 調査方法と調査内容及び時期

前回と同一であるから省略する。

3. 分析手順

①県別に、O県では実業系（以下、課程Ⅰとする）と普通系（課程Ⅱとする）とし、K県では実業系（課程Ⅲとする）と普通系（課程Ⅳとする）及び中学（課程Ⅴとする）とに大別した。そして、各項目の訴え得点をもとに、同一県内の課程差、（即ち、O県ではⅠとⅡ、K県ではⅢとⅣ）と男女差（但し、Ⅰには女子の標本はない）を、また、地域差をⅠとⅢ、ⅡとⅣにおいて、TおよびF検定によって比較した。

②課程間及び地域間に差のある項目の中から重要なものを選択し、いくつかの項目と課程、性をクロスさせて、その問題点を把握することとした。

Ⅲ. 結果と考察

1. 身体症状における課程差など

各項目は五段階尺度による反応であるから、その得点の検定による比較によって、O県とK県内の両方ともに有意な課程差のあった項目は、次のとおりである。

(E4) 首・肩・背中などがこる、(E13) 頭が重いとか、ぼんやりすることがある、(E14) 身体全体が疲れている感じがするの3項目である。もちろん、身体症状に対する質問項目15項目は、各々部分的には課程差が見られ、後述のクロスの分析で適時取扱う。

表2-1は(E13)の訴えを課程別、男女別に比較したものである。身体症状の反応は、5いつもある、4わりあいある、3時々、2あまりない、1ぜんぜんない、の五段階であるので、相当に身体症状の訴えは多いといえる。この表から、男子では、O県及びK県ともに、普通系が多く、また男女差では女子の訴え率が高い。(E4)(表3-2参照)と(E14)でも同じような傾向である。

次に課程間の県外差(ⅠとⅢ又はⅡとⅣ)がいずれかにある項目は、実業系では、(E1)頭痛がする、(E4)首・肩・背中などがこる、(E5)筋肉や関節などが痛む、(E6)脈が急に早くなったり、くるったりする、(E7)胸や心臓のところがしめつけられる感じがする、(E8)息ぐるしくなることがある、(E9)手や足などがしびれる感じがする、(表2-2参照)、(E10)目がかすんで見づらい、(E11)目まいがする、(E13)頭が重いとかぼんやりした感じがする、(E14)身体全体が疲れている感じがするの11項目である。そしてO県がK県に比して高いのは、(E1)のみ

であり、K県実業系の身体症状の訴え項目数の多さと、訴え程度が高いことを意味している。

一方、普通系では、県差のある項目は、(E3)はき気がする、(E5)(表3-1参照)、(E9)、(E10)、(E13)、(E14)、の6項目であるが、男女ともK県が高い。

これらの結果から、K県はO県に比較して身体症状の訴えは多く、その症状程度も高いといえる。特に実業系男子の間に有意差のある訴え項目が多く、その愁訴の程度も高い。普通系でも項目数は若干少なくなるとはいつても6項目に県差が見られ、O県よりK県が多い。

2. 家庭及び学校生活における課程差など

生活上の項目で、地域別課程間にいずれも有意差の見られるのは、(D3)おとうさんはあなたのことをかまってくれますか、(D6)あなたはおかあさんを尊敬していますか、(D8)おかあさんはあなたのことをかまってくれますか、(D9)おかあさんはあなたの将来のことについて心配してくれますか、(D10)おかあさんと日常生活や将来のことについて話し合いますか、(D15)あなたは他の人や目覚まし時計などでおこされないと起きないですか、(D16)あなたは朝食をとらずに登校しますか、(D17)あなたは、朝から食欲がありますか、(D20)学校は楽しいところだと思いますか、(D23)あなたは試験が近づくと下痢や便秘をすることがありますかの10項目にのぼる。

家族関係で母親との関係が4項目と多く、父親との関係1項目と対照的であり、母親への依存度が高い。

表4-1は、(D3)のクロス集計結果である。男子では地域別課程間に有意差は見られないが、K県内では、実業系で「割合にかまってくれる」と反応したものが他の普通系、中学に比較していくぶん少ないのに対し、「かまってくれない」と負の反応を示したものが多くなっている。一方、女子ではK県の実業系の「割合にかまってくれる」と反応したものは14.4%で、他のどの課程の男女よりも極端に落ち込んでいるのが分かる。

表4-2は(D8)のクロス集計結果であるが、母親が「割合にかまってくれる」と反応したものは、O県の男子は実業系31.1%、普通系33.8%であるのに対し、K県では男子の実業系28.6%、普通系47.4%である。特にK県の実業系と普通系の差はO県に比較して著しく大きいといえる。

一方、女子でも両県の普通系及び中学生が50%を越しているにもかかわらず、実業系は31.0%であるから、「かまわれていない」と意識している実業系が多いといえよう。

また、表4-3では、母親との対話の有無の状況を比較しているが、この項目でも男子では普通系が実業系に比較して両県とも友好的である。また、O県とK県での普通系男子においては、O県の方が対話が多いと反応している。一方、女子ではK県の普通系と実業系で20%あまりの大きな差となり、やはりこの項目でも実業系女子の低さが顕著である。

以上のことから、思春期における家族関係は、父親より母親との関係で構成されているが、O県の方がK県よりも、その関係は友好的であるといえよう。しかし、両県とも普通系より実業系が悪く、特にK県ではその差が著しく大きいといえる。

表5-1は(D15)自律起床のクロス集計結果である。「よくおこされる」と訴える者は、4～

6割に達し、特に男子では実業系も普通系もO県に比較してK県に多い。また、両県とも実業系より普通系に多い。

表5-2は、(D17) 食欲についての比較であるが、「あまり食欲がない」と訴える者は、男子ではO県に多く、しかも実業系に多い。しかし、いずれにしても中学生に対し、食欲のない高校生が多いことになる。一方、女子でも普通系でO県がK県より12%多い。しかしK県の普通系と実業系では20%程、実業系に食欲のない者がある。

家庭生活、特に朝の生活の中で、高校生は中学生に比して、自律起床ができにくく、食欲もないといえる。しかも自律起床のできにくい傾向は、普通系に見られ、食欲のなさは実業系に見られる。一般に、自律起床ができなくて食欲もないという現象が当然のようであるけれども、今回の調査結果は矛盾している。このことは食事への配慮やとり方あるいは家族関係とも関連していると考えるのが適当ではないだろうか。即ち、普通系は母親との関係も友好的であるし、夕食を一人でとる者の比率でも実業系の12.4%に対し、普通系では5.4%であることなどから、実業系よりも特に母親の子どもに対する生活管理の配慮がよくなされていると考えられる。

O県がK県よりも食欲のない者の比率が高いことの原因は不明であるが、通学区域・時間・間食などの他要因との関連で追求すべきであろう。

表6-1は、(D20) 学校生活の楽しさについて、表6-2は(D22) 試験等の緊張についてのクロス集計結果である。

学校生活が楽しくないと訴える者は、O県とK県の間では実業系男子と普通系女子にかなりの差が見られ、K県の方が楽しくないと訴えている。また、同一県内の実業系と普通系では、両県とも実業系に多い。特にK県の実業系は男子で36.1%、女子で37.3%と極めて高い値を示している。

試験等の緊張についても、O県よりK県の方が緊張する割合が多く、両県には男女とも有意差がある。また、K県では男子の実業系と普通系には有意差は見られないが、女子では普通系に多い。

3. 身体症状と家庭・学校生活におけるクローズ的処置

上記までに述べた諸結果の中から、主要な項目間について、課程別に検討する。

表7-1は(D20) 学校生活の楽しさと身体症状の(E4) 首や肩・背中などがこるを課程別・男女別にクロス集計したO県実業系男子とK県実業系男子の結果である。

学校生活が楽しくなくて、身体のこりをよく訴える者の比率は、O県男子実業系で4.2%、普通系6.9%、女子普通系4.2%であるのに対し、K県では、男子は実業系9.8%、普通系7.6%、中学3.4%であり、女子は実業系14.4%、普通系11.8%、中学5.7%である。両県の普通系男子にはさほどの相違はないが、実業系男子と普通系女子においては、約2~3倍の高い比率でK県に多いことがわかる。このように「学校生活は楽しいですか」の五段階尺度のうち、「3」「2」「1」に反応したものと身体症状の「5」「4」「3」に囲まれる者が、その項目の全回答者で除した値を学校生活が楽しくない者の訴え率と考えた。下記の図は、その訴え率がかかなり高いものだけを選んで掲載している。

表7-2 「学校は楽しくない」(D20)と「身体症状有り」の項目別・課程別・男女別の比較

単位：%

項 目	E 5 筋関痛	E 11 めまい		E 12 腹 痛		E 13 頭重感		E 14 疲労感			
		♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀		
O	I	2.4		2.8		3.8		2.4		4.1	
	II	5.1	2.0	4.0	1.9	6.3	2.3	5.5	1.3	7.0	3.3
K	III	9.9	7.6	5.9	15.3	8.3	12.7	5.9	11.0	8.9	13.6
	IV	4.0	13.2	4.5	4.4	5.4	5.8	3.6	5.9	6.3	13.2
	V	6.1	1.9	1.1	2.5	1.2	1.3	3.3	5.1	6.1	4.4

この表から学校生活楽しくない者は、身体的愁訴を訴えやすく、K県の(E5)「筋肉や関節が痛む」が普通系女子に多いのみで、あとの項目は、全て、男女とも実業系が高いといえる。O県とK県の普通科男子の訴え率は、それ程の差がないのであるから、K県の実業系の男女及び普通系女子の訴えは相当高いことになろう。

身体症状と生活性格などの項目間のクロス集計結果の中で、自律起床ほどその負の訴え率が高く、しかも項目数の多いものはなかった。そこで、下記の表に特に高い訴え率を示すものを提示した。

これらの原因は、夜更しにあると思うが、いずれの項目においても、実業系よりも普通系、男子よりも女子、O県よりもK県という構図である。

表7-3 自律起床と身体症状の負の訴え率の比較

単位：%

項 目	E 1 頭 痛	E 4 こ り		E 5 筋関痛		E 11 めまい		E 13 頭重感		E 14 疲労感			
		♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀	♂	♀		
O	I	7.6		13.5		9.0		7.3		6.6		11.7	
	II	9.6	16.6	17.2	18.8	12.8	11.7	8.4	15.6	11.1	16.3	19.6	16.7
K	III	7.4	13.6	18.5	18.6	17.2	9.3	7.3	11.9	10.8	11.9	17.2	10.2
	IV	16.0	19.1	27.7	32.4	25.4	11.8	14.7	19.1	18.3	20.6	27.4	25.0
	V	6.2	12.2	12.4	23.6	11.2	15.6	7.8	10.9	10.0	13.7	11.1	13.3

NHK 国民生活時間調査では、子どもの生活時間の中で、全体に宿題や塾での学習が増え、遊びや仕事そして睡眠時間まで減少していることを報告しているが、この結果はその負の効果といえることができる。一見、学校生活が楽しくて、それだけならば実業系よりも身体愁訴の発現は低いはずの普通科高校生は、課外から家庭での夜半まで、特に勉強というストレスを受けているといえよう。

河添氏のいう「睡眠相遅延症候群」の1つと考えてよい。また、女子に多いのは男子なみの外的ストレスとともに、内分泌の変動による影響による増加分があると考えられる。

4. 心理的性格的側面における課程差など

心理的・性格的側面で課程差の見られるのは、(F1) あなたは1つのことに熱中するほうですか、(F6) あなたは自分を自信家だと思いますか、(F7) あなたは自分の気持ちをわかってもらえないことがよくありますか、(F9) あなたは自分を楽道家だと思いますかの4項目である。特に(F9)は、県内間及び県外間の各課程に有意な差が見いだせる。

表8-1は、(F6)「自信」についてのクロス集計結果である。自信家であると自己を評価している者は、男子では、O県の実業系10.1%、普通系21.3%であるのに対し、K県では実業系4.9%、普通系17.4%、中学11.6%となっている。両県とも普通系が実業系に比較して自信もちといえる。一方、女子でもK県の実業系の自信のなさが顕著である。

荻谷氏の次の文章は大変に参考になるので引用する。

『普通科-職業科』という高等学校の格差が、すでに高校入学以前の段階で生徒の高校卒業後の進路意識に独自の影響を及ぼしている。学校格差の存在が、生徒の進路意識に変容をもたらしているのである。……中略……学校格差はどのようにして生徒の進路意識に影響を及ぼしているかを考える時には、予期的社会化「所属する以前に、ある集団の価値や規範をあらかじめ内面化する」のメカニズムが働いている。職業科高校へ進学する者は、高校選択の過程にすでに、卒業後の就職という進路を選びとる。普通科の場合は、大学・短大への進路が当然であると信じられている。』

実業系のこの自信のなさは、社会の学歴尊重と高校のランク付けと進路との結びつきを強化し、それを認めていく社会的体制そのものの中に存在しているといえよう。

5. 心理的・性格的側面と家庭・学校生活及び身体症状のクロスの処置

下記の表は、(F6)「自信」と(D20)「学校の楽しさ」などを課程別・男女別にクロス集計したものである。

表9-1 「自信がない」(F6)と心理的・性格的項目の負の訴え率の比較

単位：%

項 目	D20 学校の楽しさ	D22 試験時の緊張		F2 心配する		F3 気になる			
		♂	♀	♂	♀	♂	♀		
O	I	12.5		20.9		32.3		35.8	
	II	12.5	7.4	18.7	21.8	25.3	38.6	23.4	38.1
K	III	31.0	39.8	30.9	44.1	33.8	55.1	36.8	55.1
	IV	12.9	11.8	26.3	27.9	26.2	51.5	31.6	44.1
	V	14.4	13.1	36.7	32.5	22.8	41.5	23.5	47.2

自信もなく、学校生活も楽しくないと訴える者は、O県では実業系男子12.5%、普通系男子12.5%であるのに対し、K県では実業系31.0%、女子39.8%、普通系男子12.9%、女子11.8%、中学男子14.4%、女子13.1%である。普通系男女には、県差はないが、実業系には大きな差が見られる。「学校の楽しさ」と「自信」の各々の単独の差が、さらに増幅されたと見てよいだろう。

また、(F6)「自信」と(D22)「試験時の緊張」の関係は、上記の構造と基本的には変わらないが、

普通科においてO県よりK県の訴え率がやや大きくなっている。また、心理的な(F2)心配ごとをするほうですか、と(F3)ちょっとしたことが気になるの二項目では、K県女子の訴え率は50%以上にもなり、男子又はO県女子に比較して顕著である。K県の女子高校生はかなり心理的な不安状態となっているといえよう。

また、中学においてすでに、O県の訴え率を全ての項目において上まわっていることから、中学校から高校への進路選択に伴う諸状況が、K県ではO県に比して大きな負担となり、そのことが特に心理的側面や家庭・学校の生活のあり方まで影響しているように思う。

さらに、高校生では普通系高校生に問題がないわけではない。特にK県はO県に比して、母親のかまい度が非常に高く、かつ身体症状も多いことなどは留意すべきことであろう。河合氏の「母性社会の永遠の少年」という表現や、小此木氏の「モラトリアム的人間」という言葉からも注意したいことである。そのことは、K県出身者の大学入学後の留年や退学が極めて多いという報告との関連を考えてみる必要があるように思う。普通系生は実業系生に比して3年間母親への依存度を増し保護管理されるとともに、生活リズムの破綻をよぎなくされる。

子どもの心身の健康に重大な危機的現象が生じた時には、そこには非教育的働きかけが存在するという観点と、その解決のための方策の具体的検討が早急に必要であるように思う。

K県の学校格差拡大と進学競争激化の状況はますますこうした状況を増幅させると考える。

IV. 結論とまとめ

思春期青少年の心身の健康問題を生起させている背景要因の解明のため、現実の中高校生の愁訴や家庭、学校生活、並びに心理的・性格的側面を、二県による地域差、課程差、男女差などを比較検討し、重要な数項目間にクロス的分析を加えて検討した結果、次のような知見を得た。

1. 身体症状の訴えでは、学校格差や進学競争の激しいと思われるK県に多く、その愁訴程度も高いといえる。
2. 思春期青少年の家庭生活は、父親より母親との関係が友好的であり、特に普通系が実業系よりもよい状況といえる。特にK県ではO県に比して、普通系と実業系との間に大きな差が見られる。
3. 学校生活を楽しくないと意識している生徒は、身体的症状が多く、かつ強く現われる。
4. 自律起床のできにくい生徒は、高校生で増加し、そのため多くの身体症状の発現に関係しているように思える。
5. 「自信」や「熱中」あるいは「心配する」などの心理的・性格的側面では、実業系男女に問題点が多い。
6. 「自信」とその他の「心理的・性格的項目」とのクロス的分析を行なうと、各項目単独のもつ意味よりも深い関係が明らかになると考える。

